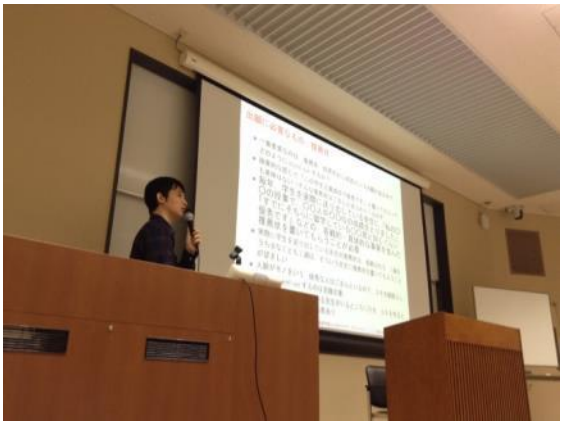
第 75 回　国際経済協力セミナー

外大出身経済学者からのキャリア・アドバイス: 海外 Ph.D.と「数学もできる外大生」のススメ

講演者：藤嶋翔太氏

**　東京理科大学経営学部講師**

文責：永井哲平



　藤嶋氏は、東京外国語大学外国語学部英語専攻で学ばれた。外大時代には、環境経済学ゼミに入られたことをきっかけに経済学の応用範囲の広さに興味を持ち、卒業後は、東京大学大学院経済学研究科修士課程に進まれる。修士課程を修了した後はセントルイス・ワシントン大学に進学され、経済学の博士号を取得された。帰国後は、東京大学空間情報科学研究センターにて、講師として 3 年間勤められた。その後 2016 年春から東京理科大学経営学部で講師としてお勤めになっている。

1. 北米で Ph.D.を取得するためのプロセス

　北米では、医学や法学などを除いた分野の博士号は Doctor of Philosophy と呼ばれ、

これを Ph.D.と略す。ここでの Philosophy は「(理論的な) 知の総体」という意味である。そのまま和訳した「哲学」という意味ではないが、実は藤嶋氏も最近までそうだと思っており、知人から聞いて初めて知ったのだと語った。藤嶋氏の場合は経済学の博士号なので、”Ph.D. in Economics”などと表記される。北米以外でも Ph.D.を取得するプロセスはだいたい同じであるが、分野が異なるとそのプロセスはかなり変わる場合がある。

北米の大学院では、ほとんどの場合学費は免除される。さらに、藤嶋氏のケースでは、教務補佐などの業務をすると生活費も支給される。この生活費は stipend と言って奨学金ではあるのだが、日本の多くの奨学金とは異なって返済義務はない。ちなみに学費を払おうとすると年間 300-400 万円近く必要になるため、自腹ではとてもまかなえなかったそうだ。また、修了後については、日本では、経済学のような社会科学分野で博士号を取った場合、進路はほぼ研究職に限定されてしまう。その一方で、北米の場合では、研究職のみならず、国際機関、政府機関、民間企業など進路は多様である。

大学院の 1 年目は、主に経済学と数学で構成されるコースワークがかなり忙しい。1 年目が終わると「preliminary examination: プレリム」と呼ばれるミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学の試験があり、不合格であれば退学になってしまう。藤嶋氏はこれを外大における主専攻の勉強がさらに厳しくなったようなものだと語った。

藤嶋氏が在籍していたワシントン大学の場合、2 年目に second-year paper、3 年目に third-year paper、4 年目に dissertation proposal、5 年目に博士論文をそれぞれ提出するというカリキュラムとなっている。これについて、北米の大学院に留学することの利点は、しっかりとしたトレーニング環境が整っていることだと藤嶋氏は強調していた。北米の大学院に出願するために必要なものは、以下の 5 点である。

1. 推薦状 3 通
2. 成績表（学部、大学院）
3. TOEFL, GRE のスコア
4. Statement of Purpose
5. Writing Sample

はじめに推薦状であるが、これはもっとも重要である。世界中に何百とある出願の中から目に留めてもらうためにも、毎年学生を実際に大学院に送り出している先生に、客観的・具体的事実を含んだ推薦状を書いてもらうことが必要となる。3 通のうち少なくとも 2 通は、実際に海外へ学生を大学院に送り出している先生に書いてもらうことが望ましい。なぜなら、信頼してもらえるからである。優秀な人が多くいる中コネ無しで目に留めてもらうのは非常に難しいので、毎年大学院へ学生を送り出している先生の授業を受けたりするなどして、コネを作るところから始める必要があるという。

次に成績表であるが、特に数学（解析学、線形代数、統計学）と経済学の成績が重要である。なぜなら、1 年目の勉強についていけるかどうかの判断材料になるからである。

外語大は文系の単科大学であり、これらの科目の成績をとることは難しい環境である。そこで、単位互換制度を活用し、近隣の一橋大学や東京学芸大学で数学や経済学の授業を履修するべきである。経済学などに興味を持っている学生同士で、勉強会を行うなど助け合いながら勉強することが望ましい。成績表は重要ではあるが、各国各大学の評価基準には差があるため、判断材料にはなるが加点要素にはならない。

続いて TOEFL と GRE であるが、これは足切りに使われ、TOEFL の基準は 100 点である。多くの人が 100 点を越えるために多大な時間とお金を費やすが、外大生は他大と比較して語学に堪能であるので、この点では外大生の強みを活かすことができる。GRE とは Graduate Record Examination のことで、北米の大学院に進学する時に受ける共通試験であり、日本でも受験が可能である。Verbal、Quantitative、Writing の 3 セクションからなっており、Verbal はアメリカ人にとっての所謂、国語のテストである。非常にマニアックな単語が出たりして、外大生にとっても難しい内容である。それに対して、Quantitative は算数であり、これはほぼ満点を取る必要がある。Writing は英作文であり、スコアが高いことに越したことはない。また Statement of Purpose であるが、これは志望理由書である。志望理由書に含めるべき要素は 4 つある。1 つは、自己紹介、自分の興味関心、そして志望動機、2 つは、学部や前の大学院での経歴、3 つは、自分の最近の活動と現在の活動の関連性、4 つは、自分の学問的関心を詳しく述べることである。しかしながら、この理由書は、入試担当者によって重視されたり、されなかったりするようである。

最後に Writing Sample であるが、これは修論や卒論などの論文でよい。それなりのものが出せれば目を引くかもしれないが、経済学では提出してもしなくても良いことがある。こちらよりも数学で良い成績をとる方に力を入れたほうが良いと藤嶋氏は考えている。以上は経済学の大学院の例であって、学問が変わると重要視される要素が変わるようである。例えば英文学では、推薦状は最重要ではなく、むしろ論文の方が重要である。

2. 学部生のうちにやるべきこと

学部の段階では、将来自分が何で勝負していくかわからない。そんな中で藤嶋氏は、どの分野においても役に立つ汎用的なスキルを 3 つ挙げた。1 つ目は、英語力である。藤嶋氏の定義によれば、国際的な仕事には、英語で論文を書いたり、外国人と共同で作業したり、英語で発表や討論をしたりする機会がある。国外の大学院に進学するためにも TOEIC や TOEFL の点数を求められることが多いそうだ。これらのテストには期限があるため、自分の進路で必要なときに活用できるよう、学部生のうちに英語力を身につけ、ある程度定期的に受けておくことが望ましいという。

2 つ目のスキルは、統計的リテラシーである。統計的リテラシーとは、統計学を使ってデータを読み解き、分析するための知識である。統計学を学ぶには数学力が要される

が、経済学者になるつもりはないからといって数学の勉強を怠ると後で損することになる。統計学が様々な分野で役に立つものであるということは、西内啓の著書からも明らかである。統計学を学べば『どの分野の議論においてもデータを集めて分析することで最速で最善の答えを出すことができる。』

3つ目のスキルは、プログラミングである。先述の統計学の知識に加えて自分でプログラムを書き、実践できるようになることが望ましい。最近では、実用性もあり、実績があるプログラミング言語が身近になってきている。インターネットにつながるパソコンさえあれば作業を効率化、高速化できるプログラミングのスキルが役に立つことは当然であろう。これら三つのスキルは、文理問わず将来役に立つものである。

質疑応答

Q. 経済学を人の役に立てる仕事は他にもありそうだが、なぜ北米の大学院で博士号を取って経済学者になったか、大学院に進まないという選択肢はあったか。

A. 大学院で5年間過ごすことに多少の迷いはあったが、しっかりしたトレーニング環境が整っている北米に進学することに決めた。一度社会に出てから進学するというのも一つの選択肢でもあった。

Q. 「国際的」な仕事をどのように考えるか。

A. 外国人と仕事をするということ。

Q. 学部生の時に関心があったことは何か。

A. 主専攻語より、経済学への興味が強かった。

Q. 汎用性高いスキルはどこでも得られると思うが、外大でならでは得られるスキルとは何か。

A. やはり、英語力・統計リテラシー・プログラミングスキルの3つである。

Q. 単位互換によった他大学の授業と外大との違いは何か。

A. 外大の授業はあくまで導入であって、学部の他大の授業はより専門的であり、数学を使った授業を行う。

今回の講演においては、前半は藤嶋氏の経験に基づいた北米の大学院のお話や大学院に進むには何が必要なのかについてのお話、後半はグローバル人材とはいったい何か、また学部生が今、学ばなければいけないことは何なのかということについてのお話をしていただいた。この講演はこれから自分の進路・キャリアを模索していく一年生を中心とする講演会に参加した学生たちにとって刺激的なものになったと思われる。将来の道がまだ確定していない受講生たちにとって、たった今何をすべきなのかを知れたことはとても幸運なことであったであろう。受講生たちが今後、言語や普段の授業の勉強だけでなく汎用的なスキルを身につけるために取り組んでいくことが望まれる。